世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『二つのプレゼント』

第 10 話

制作　日本アニメーション
　　　フ ジ テ レ ビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第10話「二つのプレゼント」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
バロー弁護士
ラビニア
ガートルード
ジェシー
アーメンガード

ロッテイ

洋服屋の主人

ジャンプ（子馬）

シーザー（猫）

ボナパルト（オウム）

エミリー（人形）

1 ミンチン女学院・廊下

振鈴が鳴る——

教室から教科書を抱えて出て来るミンチン——

2 同・教室

地理の時間だったらしく、黒板にインド半島が描かれている。

代表生徒の役目で、消そうとしかかるセーラ。

ロッテイ、アーメンガード以下の女生徒たちが取囲む。

ロッテイ「ね、ね、セーラのパパ、インドにいるんでしょ」

セーラ「ええ、そうよ」

ロッテイ「ダイヤモンドのお山って、どこにあるの？」

セーラ「（微笑）まあ、またダイヤモンドのお話？」

ロッテイ「だって、何度だって聞きたいもん」

セーラ「お父様からのお手紙だと……」

消しかけたインドの図を指でさす。

セーラ「私がいたボンベイから、ずっと奥地に入った、このハイデラバードのそばに、ゴルコンダと云う古いお城があるそうなの」

アーメンガード「そのお城がダイヤなの？」

セーラ「（微笑）違うのよ。お父様のダイヤモンド鉱山は、その近くらしいの」

ロッテイ「わあ、じゃ、そのお山が全部ダイヤモンドなのね」

セーラ「（笑って）ロッティ、そんなことないと思うわ」

その時、机の方で教科書を手に、ラビニアがガタンと立つ。

ラビニア「やめてよ！　小さい子相手に、出まかせ云うのは……」

セーラたち、振返る。

ラビニア、ガートルードとジェシーを従える形で、前に出る。

ラビニア「ロッテイ。ダイヤモンドで一杯の山なんてあったら、みんな大金持になって気が変になっちゃうわ……尤も、セーラは大金持の娘になったつもりで、気が変になってるんでしょうけどね」

セーラ「（怒りを押える）私は、お父様から来た手紙の事を話していただけよ」

ラビニア「ええ、そうでしょうとも……きっと、あなたのお父様は、どこからかダイヤモンドを拾って来るんでしょ。体中まっ黒になりながらね」

ロッテイ「違うわ、セーラのパパは、ダイヤのお山の持主よ。ラビニアなんて、ダイヤの事知らないくせに」

ラビニア「知ってるわよ！」

ロッテイを睨み、セーラに眼を向ける。

ラビニア「ダイヤモンドぐらい、うちのお母様だって持ってるわ。
それも、普通の人の一年分のお給料でやっと買える程の
ダイヤの指輪をね」
ほこらし気に皆を見廻して続ける。
ラビニア「でも、そのダイヤは、アフリカで採れたものだそうよ。
インドでダイヤモンドが採れるだなんて、聞いた事もな
いわ」
顔を見合せるロッティ、アーメンガード、女生徒たち。
セーラ「あなたと云い争うつもりはないけど、お父様は、ダイヤモ
ンドが採れたとは、云ってはいないわ。有望な鉱山を手に
入れたと、手紙に……」
ラビニア「（冷笑）じゃ、今の所、あなたのお父様は、ダイヤモン
ド王になったつもりだけってことね。あなたの、プリン
セスになったつもり、みたいに……それなら、誰にだっ
てなれるわ」

ラビニア、アーメンガードに的を移す。

ラビニア「アーメンガード、あなたも、プリンセスのつもりになったらどう？」

アーメンガード「えっ、私？……（ドギマギする）わ、私は駄目よ、だって、太りすぎてるもの」

哄笑するラビニア——ジェシーとガートルードに、

ラビニア「聞いて？　アーメンガードには、自分の事がよく判ってるわ。でも、セーラには、それがまるで判ってないのよ。第一プリンセスにしては、やせっぽちすぎよ」

セーラ「ラビニア……」

ラビニア「なによ」

セーラ「なにかになったつもりと云うのは、心の事よ。別に、体つきや、持っているものとは関係ないわ。その人が、誰かになったつもりで、考えたり、行いをしたりすればいいのよ」

ラビニア「流石、代表生徒のお答えね。じゃ、これからあなたの事

をダイヤモンド・プリンセスと呼んでさし上げるわ」
ラビニア、一同にアジる。
ラビニア「いいでしょ、みんな……この学校には、プリンセス様がいらっしゃるのよ。きっとこの学校もさぞ有名になることだわ」
ラビニア、セーラに眼を戻す。
ラビニア「ね、ダイヤモンド・プリンセス……いずれ女王様におなり遊ばしても、私たち下々のことをお忘れなさらぬよう、お願い申上げますわ……では、失礼を……」
ラビニア、ジェシーとガートルードの腕をとると出て行く。
凝然と見送るセーラ――

3 同・廊下

来るラビニア、ガートルード、ジェシー。

ガートルード「ね、待ってよ、ラビニア」

立停るラビニア——

ラビニア「なによ」

ジェシー「（恐る恐る）あなた、セーラを憎んでるの？」

ラビニア「憎んでなんかいないわ……ただ、あの子が、ダイヤモンド王の娘だなんて、信じられないだけよ」

そこへアメリアが来かかる。

アメリア「（微笑）まあまあ、みなさん、こんな所で、内緒話？」

ラビニア「ええ、そうなんです、アメリア先生」

ジェシー「ラ、ラビニア……」

ラビニア「（構わず）ね、先生、私たち、セーラさんのことを、ダイヤモンド・プリンセスって呼ぶ事にしたんです」

アメリア「（驚く）ダイヤモンド・プリンセス……」

ラビニア「この学校の代表生徒として、とてもふさわしい呼び方だ

と思いますわ」
アメリア「まあ、なんて素敵なニックネームなんでしょう……きっと院長先生も、大喜びされますわよ」
アメリア、弾む足取りで去る。
ラビニア、皮肉な微笑で、ガートルード、ジェシーと顔を見合せる。

4 同・ミンチンの部屋

外出用の帽子をかぶったミンチンが、鏡に向ってかぶりを確かめている。
弾むように入って来るアメリア。
アメリア「お姉様、お聞きになりまして？　生徒たちが、セーラさんのことを、ダイヤモンド・プリンセスと呼び始めてるんですって」

ミンチン、鏡の中で、チラリと視線を走らせる。

アメリア、浮き浮きと後手にクルリと廻る。

アメリア「なんて素晴らしいんでしょう。この学校も、とうとうプリンセスを生徒に持つ程になれたんですわ」

ミンチン、ジロリとアメリアに向き直る。

ミンチン「アメリア……」

アメリア「は？」

ミンチン「生徒たちはともかく、あなたまではしゃぐとは、どう云う事です」

アメリア「で、でも、お姉様……」

ミンチン「（低く）アメリア……私たち姉妹（きょうだい）が、ここまでやって来られた中に、忘れてはならない教訓があった筈です」

アメリア「えっ……」

ミンチン「物事は慎重であるべきこと……あのダイヤモンド鉱山の話も、充分に確かめてみる必要があります」

アメリア「あの、それで、どこかへ……」
ミンチン「弁護士のバローさんの事務所です」
アメリア「まあ……」
ミンチン「あの方は、セーラ・クルー氏の、ロンドンに於ける代理人です……ダイヤモンド鉱山の情報も御存知かも知れません」
アメリア「え、ええ、お姉様……」
ミンチン「では、あとを頼みましたよ」
ミンチン、出て行く。
茫然と見送るアメリア——

5 町の通り

辻馬車に乗って行くミンチンの姿——

6　バロー法律事務所・表

その馬車が着き、ミンチンが降り立つ。

7　同・事務室

ミンチンと入って来るバロー。

バロー「いやあ、ミンチン先生、あなたがわざわざ私の事務所にお見えになるとは、思ってもみませんでしたよ」
ミンチン「実は、セーラ・クルーの父親が、ダイヤモンド鉱山を手に入れたとかの件について、あなたにお尋ねしたいと存じて」
バロー「ほほう、矢張り、クルー氏がお嬢様に手紙を送りましたか」
ミンチン「ええ……」
バロー「その通りですよ、ミンチン先生……あの子の父親は、イン

ドで世界有数と思われるダイヤモンド鉱山の持主になられたのです」
ミンチン「世界有数……それは本当の事なんでございますか」
バロー「勿論ですとも……何故なら、この私も、既にクルー氏の鉱山に、かなりの投資をさせて貰ってるのですからな」
ミンチン「まあ……」
バロー「ミンチン先生……ひょっとすると、あなたも、インドでダイヤモンドが採れると云う事に、疑問をお持ちかも知れませんな」
ミンチン「え、ええ……」
バロー「私も、投資をする以上、いささかダイヤモンドの勉強をしましたよ。ごらん下さい」
バロー、傍の大型本をとる。

バローの声「これは、インドのゴルコンダで産出した、コイヌール
　　　　　と呼ばれる一〇六カラットもあるダイヤモンドで、今
　　　　　は、わがイギリスの王室の所有となっているものです
　　　　　……」

　　　　　　　　　　　　——赤い布の上に輝く巨大なダイヤA。

×　　　　×　　　　×

　　　　　　　　　　　　——青い布の上に輝く巨大なダイヤB。

バローの声「これもインド産で、フロレンチチンと呼ばれる一三九
　　　　　カラットのダイヤ。イタリアのトスカナ殿下がお買い
　　　　　求めになったものです……」

×　　　　×　　　　×

　　　　　　　　　　　　——緑の布の上に輝く巨大なダイヤC。

バローの声「これこそ、インド産出中、最大の、二五〇カラットも
　　　　　ある、グレート・モーグルと呼ばれるダイヤモンドで
　　　　　す……」

9

バローー法律事務所・事務室

大型本を開いてミンチンに講釈するバロー。

バロー「そのほか、ロシアのエカテリーナ2世に贈られた、オルロフと呼ばれる一九四カラットのダイヤ……古来、持ち主に次々に不幸をもたらした事で知られるホープと名づけられたダイヤ……いや、歴史上有名なダイヤモンドの多くは、インドのゴルコンダで産出されておるのですよ」

興奮に身を震わせるミンチン——

ミンチン「そ、それ程のダイヤモンドの出る鉱山を、あの子の父親が……」

バロー「そうですとも、ミンチン先生……私もあなたも、あの少女をきっかけに、素晴らしい幸運を掴みかけておるのですぞ」

バロー、本を閉じると、

バロー「一所で、ミンチン先生……間もなく、あの子の誕生日が来る

そうですな」

ミンチン「え？……ええ……」

バロー「誕生パーティは、盛大にやって頂く必要がありますぞ。実は、私も、あのお嬢さんの為に、思い切り値の高い誕生日の贈物を手配するよう、クルー氏に依頼されておるのです」

ミンチン「まあ……判りましたわ、バローさん、うちの学校でも、セーラさんの為に、思い切った誕生パーティを開くつもりでございますわ。ええ、そう致しますとも……」

10 ミンチン女学院・表

辻馬車が着き、降り立つミンチン、慌ただしく中へ——

11 同・院長室

入って来るミンチン、帽子を脱ぎ、呼ぶ。

ミンチン「アメリア……アメリア！」

アメリアが入って来る。

アメリア「あ、お姉様……いかがでした。ダイヤモンド鉱山のお話は本当だったのですか」

ミンチン「本当に決っています」

アメリア「わあ……（嬌声をあげて喜ぶ）」

ミンチン「落着いて！　わが校の誇るべき生徒、あのダイヤモンド・プリンセスは、どこにいるのです！」

――C・M――

12

同・地下の食堂

昼食を終えた女生徒たちを笑顔で見廻すミンチン――

傍にアメリア。

ミンチン「皆さん……」

ミンチン「ここで皆さんに知らせる事があります」

一方に、片附け盆を抱えたベッキー。

ミンチン「間もなく、セーラさんの誕生日が参ります」

はっとなるセーラ――

ミンチン「そこで、皆さんと一緒に、ダイヤモンド・プリンセス、セーラさんの為に、盛大な誕生パーティを開く事に致しました」

どよめく女生徒たち――驚くセーラ。

ミンチン「皆さんも、セーラさんの為に、誕生日の贈物をする事を考えて下さい」

13

同・院長室

どよめく女生徒たち——

ベッキー、凝然と聞く。

ミンチン「勿論、この私も、院長として、セーラさんに心からの贈物をするつもりです」

驚いてミンチンを見るセーラ。

ミンチン「セーラさん、その事で、あなたと相談があります。いらっしゃい」

セーラ「は、はい、院長先生……」

セーラ、立つと、ミンチン、アメリアに従って出て行く。

ざわめく女生徒たち——

顔を見合せるラビニア、ジェシー、ガートルード。

一方に、じっと見送るベッキー。

ミンチンとアメリアが、にこやかにセーラを取囲む。

ミンチン「セーラさん……先生は、あなたに誕生日に着る素晴らしいお洋服をプレゼントする事にしましたよ」

セーラ「まあ、そんな……」

ミンチン「いいえ、遠慮する事はないのですセーラさん、どこか有名な洋服屋さんをご存知？」

セーラ「いえ、私、ロンドンでは、そんなお店は……」

アメリア「知ってますわ、お姉様。私、一度入ってみたい高級婦人洋服店が……」

ミンチン「アメリア、あなたに聞いているのではありません。セーラさんにです」

アメリア「は、はい……」

セーラ「あの……お父様と、一度行ったお店がありますけど」

ミンチン「成程、ではそこに致しましょう。セーラさん、馬車の用意をなさい」

セーラ「は、はい、院長先生……」

14 同・地下の作業場

例の古いバスケットを手に入って来るベッキー――中から、古ぼけたショールを取り出す。じっとみつめたが、鋏をとると、思い切って切りはじめる――

15 同・表

停っているピーターの馬車に、ミンチンがいそいそと乗り込む。

続いて乗るセーラ――

セーラ「ピーター、前に、お父様とエミリーを見つけたお店、憶えてるわね」

ピーター「ええ、憶えてますとも―
セーラ「じゃ、そこへお願いね」
ピーター「承知しました、お嬢様……」
　ピーター、馬車を走り出させる。

16 同・馬車置場の傍

　出て来るベッキー、物蔭に坐ると、切り取ったショールの断片で、なにかを縫いはじめる――

17 高級子供服専門ブティック・表

　ピーターの馬車が停り、セーラとミンチンが降り立つ。
　ミンチン、店構えを見て、
ミンチン「そう、このお店ね。仲々結構、さ、入りましょう」

セーラを促して中へ——

18 同・店内

入って来るセーラとミンチン——
気がついた主人が驚いて出て来る。
主　人「いやあ、あんたは。あの時お父さんと来られた……」
セーラ「ええ、小父様……」
ミンチン、怪訝に見る。
主　人「ええと、なんて名前をつけたのでしたかな。そうそう、エミリー……うちから行ったあのお人形は、元気ですかな」
セーラ「ええ、とても大事にしてるわ、小父様」
ミンチン「セーラさん、そんな挨拶はあとでよろしい」
セーラ「は、はい、院長先生……」
主人、店員と怪訝に顔を見合せる。

ミンチン「洋服屋さん……今日は、この子の誕生日祝いに、プレゼントの洋服を買ってあげに来たのです」

主　人「ほう……それはそれは……」

ミンチン「この子に合う飛び切り上等の服をお見せなさい」

高飛車な態度に、主人、むっとして店員と顔を見合せたが、

主　人「では、こちらの服などはいかがでしょうかな」

一方の人体に着せた子供服に案内する。

ミンチン、チラリと見たが、首を振る。

ミンチン「いいえ、求めたいのは、もっと立派で、高価に見える服です」

主　人「ほう……では、こちらの服では……?」

別の人体の子供服を見せる。

ミンチン、確かめたが、ジロリと主人を見る。

ミンチン「あなた……この子はダイヤモンド王の一人娘なのですよ。

学校でも、ダイヤモンド・プリンセスと呼ばれている程です。それにふさわしい服はないのですか」

主人、むっとミンチンを見る。

主　人「失礼だが、院長先生とか……お子さんの着る服と云うものは、着やすくて、子供らしいのが一番です……高いものが欲しいと仰言やるなら、それこそダイヤモンドでも縫いつけた方がましですぞ」

ミンチン「まあ……」

主　人「服を着るのは、このお嬢さんです。お嬢さんが択ぶのが当然だと思いますな」

憤然と見返したミンチン、セーラを見る。

ミンチン「では、セーラさん、あなたの好きな服をお択びなさい。それから、このあと靴屋さんに廻らねばなりませんからね」

セーラ「は、はい、院長先生……」

19

ミンチン女学院・馬車置場の傍（夕景）

物蔭に坐ったベッキーが、夢中で針を動かしている。

出来上った針さしに、花の縫い取りが完成しようとしている。

ふと、モリーが呼ぶ声が聞える。

モリーの声「ベッキー……ベッキー……」

ベッキー、はっとなる。

20

同・台所（夕景）

ジェームスが働いている所へ、探しながら入って来るモリー。

モリー「全く、あの子ったら、この忙がしいのに、どこへ行っちまったんだろうね……ベッキー……ベッキー……」

呼びながら、出て行く――

21 同・三階の廊下（夕景）

そっと上って来るベッキー、ためらったが、セーラの部屋のドアを押す。

そのあとから、のっそり上って来るシーザー、うさん臭そうに窺う。

22 同・セーラの部屋

入って来たベッキー、安楽椅子に行くと、エプロンの下から取り出したヒモを掛けた茶紙包みをそっとエミリーの膝に置く。

その時、モリーの呼ぶ声――

モリーの声「ベッキー……ベッキー……」
　　ベッキー、はっとなる――

23

同・三階の廊下（夕景）

　　急いで出て来るベッキー。
　　モリーが階段を上って来る。
モリー「まあ、こんなところで、なにをしてたんだよ」
ベッキー「いえ、あの……」
モリー「フン、さんざん探させて……大方、私に隠れて骨休めでも
　　してたんだろう」
ベッキー「いえ、そんな……」
モリー「云い訳は沢山だよ。さ、早く仕事を片附けるんだよ」
ベッキー「は、はい、ただいま……」
　　ベッキー、モリーに引き立てられて階段を降りて行く。

そのあとから、のっそりと続くシーザー。

24 同・表（夕景）

点燈夫がガス灯を点けて行く。

ピーターの馬車が着き、洋服と靴の箱を抱えたミンチンと、続いてセーラが降り立つ。

25 同・院長室（夕景）

入って来るミンチンとセーラ。

ミンチン、テーブルに箱を置くと、満足そうにセーラを振返る。

ミンチン「さてと……セーラさん、今日の買物は、充分気に入ったでしょうね」

セーラ「はい、有難うございます。院長先生」

ミンチン、微笑で頷く。

ミンチン「それなら結構……では、この洋服と靴は、誕生日まで預っておきますからね」

セーラ「はい……」

ミンチン「それから、この事は、お父様に手紙でお報らせしておくように……判りましたね」

セーラ「はい、院長先生……」

26 同・三階の廊下（夜）

疲れた表情で上って来るセーラ、ドアへ行く。

27 同・セーラの部屋（夜）

入って来るセーラ——
ボナパルトが叫ぶ。
ボナパルト「セーラ……セーラ……」
セーラ、ふっと吐息する。
ふと、エミリーの膝に置かれたヒモをかけた茶紙包みに気がつく。
怪訝に近づき、取るとみつめて呟く。
セーラ「誰かしら」
セーラ、ヒモをほどくと、紙包みを開く。
出て来る花の縫い取りをした手製の針さし——
セーラ「まあ……」
茫然と見るセーラ——

28
同・洗い場（夜）

山と積まれた皿、食器の傍で、懸命に洗っているベッキー。

更に、鍋を重ねて運んで来るモリー。

モリー「ベッキー、お前がサボってたお蔭で、なにからなにまで遅れちまったんだからね」

ベッキー「も、申訳けねえス……」

モリー「さあ、それが終ったら、こっちも磨き上げるんだよ！」

どんと鍋を置く――

ベッキー「は、はい、ただいま……」

必死に皿を洗い続けるベッキー――

29

同・セーラの部屋（夜）

暖炉の上の置時計が十一時を鳴らし出す。

×　　×　　×

安楽椅子に坐り、じっと手にした針さしをみつめているセーラ――
ふと外の階段に、重い木靴の音が聞えて来る。
はっと立上るセーラ――

30 同・三階の廊下（夜）

疲れた足を曳いて階段を上って来るベッキー。
ドアが開き、セーラが飛び出して来る。
セーラ「ベッキー！」
ベッキー「あ、お嬢様……」
セーラ「シィッ……」
ミンチンのドアを警戒しながら、急いでベッキーを部屋へ誘い込む。

31

同・セーラの部屋（夜）

ベッキーと入ったセーラ、針さしを出す。

セーラ「ベッキー……これ、あなただったんでしょ」
ベッキー「は、はい、お嬢様……」
セーラ「矢っ張り、そうだったのね。私、すぐにあなただと判ったの、ありがとう」
ベッキー「そんな……お嬢様の誕生祝いにと思って……お気に召したでしょうか」
セーラ「勿論よ、ベッキー……これ、あなたが作って下さったのね」

ベッキー、嬉しそうに頷く。

ベッキー「だども、恥かしいッす……私の肩掛け切って作ったスから」
セーラ「えっ、肩掛けを切って……」
ベッキー「なに、心配ないス……大分暖かくなって来ましたし、切

った所は、内側に隠せば見えませんですから」

セーラ「まあ、そんなにまでして……ありがとう、ベッキー」

セーラ、ベッキーを抱きしめる――

ベッキー「お、お嬢様……」

× × ×

セーラのN「私は、ベッキーの気持が嬉しくて泣けそうでした……どんな高価なプレゼントより、そうです、ミンチン先生が買って下さった洋服や靴より、私にはベッキーのこのプレゼントの方が、どれ程嬉しいか知れなかったのです……」

おわり